

静かな提案「何気ない毎日こそ美しい」

写真家 渡邊真弓さんへのインタビュー

渡邊 真弓 / Mayumi Watanabeさんは、札幌で活動する写真家・デザイナーである。「何気ない毎日こそ美しい」をテーマに、日々の生活の中に煌めく美しい瞬間をそっとすくい取る写真を撮り続けている。京都造形芸術大学芸術学部通信教育部美術科写真コース在籍中日本写真芸術学会会員 NPO 法人北海道写真家ネット「ノースファインダー」写真家会員女性限定の写真教室、写真にまつわる執筆・企画提案、撮影、デザインなどを行う。道新文化センター講師、富士フィルム X セミナー講師アトリエ“allô?” (space1-15)にて、女性のための写真教室を主宰している。



直近の展示として2011年個展「air」(アルテピアッツア美唄), 2013年東川町国際写真フェスティバル・写真インディペンデンス展。富士フィルム Facebook ページ FUJIFILM X series Japanにて作品を紹介している。

Website <http://www.allo-japon.com/> “allô?” 女性のための写真教室

<https://www.facebook.com/allo.lesson>

本コラムは、ある作業に熱心にかかわっている人へのインタビューを通して、作業が人や社会にどのような作用を与えるのか、人生や社会にとっての作業の重要性を知ることが目的とする。

今回は、札幌にて女子限定でカメラの活動を進めている若手写真家渡邊真弓さんをご紹介します。彼女は、カメラを独学で学び、友人の勧めで徐々に本格的に仕事として取り組み、アトリエ活動、写真教室での講師、地方撮影など仕事の幅を広げている。多くの人とのつながりを大事にされ、周囲の人々にカメラの魅力を伝えながらその楽しさを提供している。時に難解なカメラの仕組みをやさしい口調で事も簡単にわかりやすく説明してくれる。若干絵を描くことが苦手とのことであるが、苦手な描写すらもカメラ女子の前に堂々とさらけ出し生徒の緊張感を緩めようと配慮をはかる。いつも笑顔でやさしく対応してくれるが、カメラの扱いや写真に対する姿勢に関してはプロの厳しさが現れ、芯の強さを感じさせるそんな女性である。

カメラを通した緩やかな繋がり

本誌：先生のお仕事は、写真家そして写真教室の指導者として、またカメラを通して地域の魅力発信することとお聞きしていますが、お仕事のどのような面

を大切にしていらっしゃいますか？

渡邊：一つは、好きな写真をお伝えしてみなさんも好きになってほしいことですね。もう一つは、自分の写真作品を作っていくことでその繋がりを大切にしたいと思っています。

どちらかというと、カメラ好きな女性達はカメラをひとり始める方が多いです。カメラ好きでない人にとっては、一緒に歩いている時にわれわれが立ち止まって写真を撮るとかご飯を食べる前に写真を撮るなどの場面で相手を待たすことになり、ちょっとしたイレギュラーな場面になってしまうじゃないですか。撮る側もその気持ちがわかるので、相手に申し訳ないですよ。そんなことが原因かもしれませんが、女性でカメラを持つ人はひとりが多いような気がします。そんな時、お互いに気を遣わずにカメラをやっている人同士の緩い繋がりというかそのような仲間関係があるといいかなと思っています。女性同士の感覚。離れたくなったら離れ、戻りたくなったら戻るような緩い繋がりを女性同士で作りたいかなと思います。カメラを通してそれをやっている訳です。

本誌：「繋がり」というと先生は浦河・帯広など北海道の地方に行って撮影実習をされていますが、「地域発信をする カメラを通して人・モノをつなげ

ていく」ということは具体的にどのようなことでしょうか。そちらの仕事に対してどのようなことを大切にしていますか？

渡邊：女性は特に「写真を撮る」ということを通して、自分の「楽しい」とか「美しい」といったアンテナにひっかかるものを発見しているような気がします。つまりは「良いこと探し」です。

今まで行ったことのない地域や観光協会が企画する撮影旅行に参加することで、写真を撮る楽しみのほかに、美しい風景や美味しい食べ物、そして地元の人と触れ合うことで地域の魅力を存分に体感できます。単に個人で旅行をすることよりもはるかに密度の濃い体験になると思います。今は SNS を利用することで誰でも発信ができるので、地域にとっては口コミで魅力を発信してもらえるし、撮影旅行に参加した人たちにとっては人生の彩りが増える、両方にとって素敵なのつながりになると思うのです。私はカメラ好きな女性への訴求ポイントがある程度把握できているし、私個人としても知らない地域がたくさんあるので、知っていきたいという気持ちがあります。地域発信のお手伝いをしながら、カメラを通して人・モノをつなげていく、今後はもっともっとうそういう企画に携われたらと思っています。

カメラの仕事のはじまり

本誌：写真を撮るだけではなさそうですね。それではカメラとの出会いについて教えてもらえますか？カメラをどのように始めていったのですか？

渡邊：不思議ですよ。大学生の頃、時間があつたのです。ちょうどインターネットがはじまった頃でした。紅茶が好きだったので紅茶の HP を作ったんです。院生の勉強よりがんばりました。その HP 上に写真の素材が欲しかったのですが売っているのはお金がかかるし気に入ったものがないので、それであれば自分で撮るしかないなと思い、自分で撮った写真を HP に入れ込んでいきました。それがはじまりですかね。その紅茶の HP を見た友達から、ポストカードにしてほしいと依頼されたのです。

本誌：その頃はどのようなカメラを使っていたのですか？

渡邊：はじめは家のカメラを借りて使っていました。法学科の大学院修了後、そのまま大学の臨時職員をやっていたのですが、最初のボーナスでポラロイドカメラを買いました。形がかわいくて、ぼかしたり明るくしたりできるんですよ。これを初ボーナスで買ったんですね。ご褒美として。自分のカメラがな

かったので、はじめて自分用に買いました。ポラロイドカメラは一枚とるとその場で見ることができません。じわじわと写真がでてきますから、ポラロイドの写真は当時高価だったのですが、その後他大学に事務職として就職したんですが、（アトリエの壁には、その当時写したポラロイド写真が一行に飾られている。）

本誌：その時から徐々にカメラをやり始めたのですか。

渡邊：そうなんです。ポストカードなどを作っていました。私は全部物事が人からの勧めではじまり人づてに進んでいくんです。

喫茶店での展示会・カメラ教室

渡邊：ある時、喫茶店の壁が空いたので、写真の展示をするように友達に勧められたんですよ。展示などやることがないので、いろいろなギャラリーを見て回り展示の仕方などを学びました。なんとか試行錯誤で展示会をやってみました。写真のサークルにも所属していなかったもので、聞ける相手もいなかったし、全部独学でやっていたから。

また、5年前から喫茶店の客入りが少なく元気がないので、そこでカメラを教えてくれないかと誘われ、お声をかけていただいたんです。せっかくだから1回だけやってみようと思いはじめ、それが現在まで続いているんですよ。ありがたいことに1年くらい続いて、もう自分の趣味とは言ってはられないと思いきや京都にある写真の大学に行くことにしました。これが2011年です。

本誌：就職先の仕事と写真の仕事が続けたということですね。

渡邊：大学での事務の仕事の本業務としてやりながら、週末には写真を撮ったり写真教室のテキストを作ったりしながら教えていました。来てくださるからには、期待に応えなければと思ってやっていたんですね。私の写真に共感してくれるのは女性が多かったです。今もそうですが。

2013年3月、事務職を11年勤めて一部門の仕事が一巡りしたと思い、写真の仕事をしてもいいと自然に思いました。自信は全然ないのですが、写真を撮ってみたいと決めていたように思いました。

視点の共有

本誌：カメラが好きな理由、とりこになってしまう理由はどのようなことだと思いますか？

渡邊：たぶんカメラにはまっている理由は、例えば、同じ景色を見ても違うところを見てきれいだなというじゃな

いですか。山に行ってきたきれいだねって同じように言っているけど、厳密にいうと細部のどこをきれいと思っているのか違うと思うんです。自分がきれいだと思っている所を切り取って写真にすると、私が観ているのはこれですと提示できます。

お互いにそれを共有できるというか、コミュニケーションがとれますよね。視点の共有ができます。そこから生まれるコミュニケーションが大事ですよね。そこが楽しいですね。そのコミュニケーションは好意的なものもあれば批判的なものもある。両者あって当然だと思います。自分が美しいと思っているものやそうじゃないものもあるのは当然だから。実は個展をしていてあるお言葉をもらったことがありました。写真の中に言葉が入っていたことや、色味について批判的な事を言われたことがあります。その頃は私みたいな写真はあまりなかったんですよ。見る方にとっては、違和感があるというか、びっくりはするでしょうが、そうゆう受け止め方をする人もいるんだなと思いました。自分とは違う考え方の人をないがしろにするのではなくて、意見が違う人がいるのは当たり前というか、そのように思うようになりましたね。

身の回りの何気なさがたまらなく美しい

渡邊：カメラが好きな理由ですが、皆さんもそうだと思うのですが、自分の身の回りにいかに美しいものがあふれているのか改めて気づかされるんです。なんでもないとこがたまらなく美しいと感じるんです。

<見せていただいた写真の被写体>

京都での大学のフローリング

茂みの中の光る蜘蛛の巣

雑草

カーテン

鏡に当たる陽ざし

雑然とした自転車置き場

靴

食べ終わった後にある紅茶



<鏡に当たる陽ざしの写真を見ながら>

渡邊：浦河で泊まったホテルですが、朝、目を覚ましたら陽がポーンと差ってきて、さあ一大事だと思ってパジャマのままバスルームの隅に固まって、40～50分くらい光をじっと待ちました。光が揺れるんですよ。きれいですよ。たまたまですね。ただのカーテンなのですけどねえ。

<椅子の写真を見ながら>

渡邊：さりげない風景。何も考えないでポンポンと椅子を置いているんですけど、たまらなくいいんですよ。たぶん無作為の中の美しさというか、みんなの生活にたくさんありますよね。

本誌：逆に美しくないと個人的に思うような対象についてはどう対処しますか？

渡邊：う～ん どこかいい所があるよと思えば、その中に美しさを発見したときの喜びというか、「ああたまたらん」となりますね。

多忙な体験とカメラが掬い取るもの

本誌：カメラとはどのようなものか、カメラで知ったこと、変わったことなどがありましたら教えてくださいませんか？

渡邊：何気ない日常の美しさ。そのような細かいことに目が行くようになったことが、変わったことかな。あまりにも忙しくて気がついたら夕方だったんですよ。私、今日晴れていたのか雨だったのか全然知らなかったことがありました。たぶん忙しくて業務をこなさなくては行けないと頑張っていたんですよ。晴れているとか暖かいとか何も感じることなく過ごしたということで。そういう自分がひどくショックでした。びっくりしちゃいました。でも、カメラやっていると、陽が差してきたとか、暖かいとか普段のそういった変化に気が付ける。カメラをやっていると生活が豊かになるのかもしれませんが、忙しいならやるしかないと考えているのですが、3年くらい本当に忙しかったから、たぶんその時そう感じたんですね。

写真教室：楽しさを伝える

本誌：写真教室の生徒さんへの指導に関して気を付けていることなどはありますか？

渡邊：レベルにもよりますが、基礎の人には、好きになってもらいたい。そのためには、ちょっとしたカメラ操作を知らなければならぬんですが、カメラがいいな、好きだと思える時間を作りたいと思っています。機械が嫌いな人は、きっとカメラの操作と思った瞬間にだめだと思ってしまうんですよ。これはわからない、わからない

いから嫌といった。苦手が原因で嫌いになるのは外したいと思います。ですから初回は生徒さんがわからないことを言える雰囲気作りとか嫌な事や難しいと思うことを言えるように努めたいですね。

みなさん時間とお金を使ってきているわけですからこちらはそれに見合うように、何かいいことがないと続かないじゃないですか。人生に彩がほしいと思って来ている、こちらはそれに見合うように努力していきたいですね。

本誌：レベル初級と中級での違いはありますか？

渡邊：それこそ到達目標を変えています。自分が受ける立場だったという視点で。中級は、テーマを決めて撮ってきてもらいその写真の説明をもらっているんです。その際の気づきとか必要な技法が写真に入ってきますから。毎回お題を決めて撮ってきてもらうようにしています。

上級は、作品として自分や他の写真家の勉強をします。写真集をみて考え方とか特有の視点を学ぶ。最後は、自分の作品を提出します。

本誌：教えることについてどのように思いますか？

渡邊：教えるというのではなく、おこがましいという感じでお伝えするという気持ちですね。みなさんがわかってくるとキラキラするようになるじゃないですか。撮れるようになってくるとどんどん好きになってくれる、その様子を見ていると良しいぞとなりますね。

創作活動「何気ない毎日こそ美しい」

本誌：ご自分の作品・写真創作についてはいかがですか？

渡邊：教えることは、相手が何を欲しているかそれに応じてお伝えしている、それに対して、創作活動は、私が何を撮りたいか、私を中心です。ゆずらないところはゆずらない。発表すること、創作活動をすることは大事ですね。私のテーマは「何気ない毎日こそ美しい」ですが、自分のテーマのひとつに尽きていて、これ以上でもこれ以下でもないのですけどずっとこれなんです。伝えたい、写真から伝えたいです。

静かな提案

本誌：なぜあるいはどのようにこのテーマを考えるようになったのか？このテーマで何を発信しようと思っておられるのか可能であれば、もう少し説明していただけませんか？

渡邊：単純に、今日あることは明日もあるとは限らない、という前提が私の中にあります。一期一会ともいうかもしれませんが、刹那である意味残酷な時間の経過を

指している言葉でもあります。

日々の暮らしは同じことの繰り返しのように少しずつ違っています。でも、仕事が忙しかったり大きな流れの中にいると、そのとても個人的な「暮らし」ということをついつい後回しにしたり、雑に扱ったりしてしまいがちです。寝に帰って簡単にご飯を食べてまた朝が来る。気が付いたらもう次の季節。その繰り返し。ある意味、このテーマは私自身に対する警鐘でもあります。きちんと丁寧にすべきものを大切にできているか。それを撮影することを通して自分に問いかけ、そして誰かの何かの瞬間に寄り添うことができたら良いです。だから私の写真は「静かな提案」です。特別なすごく決定的瞬間や珍しい被写体を捉えているわけでもなく、ただ単にわたしの日々の中で出会う美しさを淡々となるべく主観的になりすぎずに捉え、それを静かに提案する。それが誰かの琴線に触れて、例えば、帰り道の空がきれいだとかそんな気持ちを思い出してもらえれば、それだけで充分なのです。

本誌：「静かな提案」とは、とても強い主張が込められているんですね。写真は自分の主張がでると聞きますがこの点に関してはどのようにお考えですか？

渡邊：世の中をどのようにみているのかスタンスが出ると思います。自分が考えていることや何を見ているかがわかりますよね。

絞り切れていないとか、何を見ているかその視点はわかりますよね。その意味で自分が出るのだと思います。

冷静さ：ものの良さをどのように撮るか

本誌：撮りたいものに対する具体的な撮影のポイントを少しだけお聞きしてもよろしいでしょうか。撮る時に大切にしていることはありますか？

渡邊：きれいと思っている自分にどっぷりつかからないことですね。もうひとり客観的な自分が必要で、冷静さを加えることは大切です。「私が見ている風景きれいでしょ」というのは見ている側が疲れと思うんです。押し売りのようなところがあると疲れてしまいます。であればもっと冷静になって客観的に撮るというスタンスに立つんです。きれいだなって思う時、ちょっとだけ冷静になって、そのものの良さをどうやったら撮れるか考えます。イメージぴったりの光とかアングルがやってくるまで待ったりカメラの機種やレンズを変えて撮ったりする訳です。カメラは生活の彩。たぶん被写体そのものに息を合わせるんで

すよ。風が吹いていたり、光が差していたり、そのものの「何気ない」ことの美しさが本当に美しい。そのものの良さをいかに撮るかです。

本誌：本日は、インタビューをお引き受けいただきありがとうございました。益々カメラが興味深く感じました。

そして、やさしい色使いやぼけ感のある先生の美しい写真に強い思いが込められていることを知ることができました。今後のご活躍を切にお祈りしています。

インタビューを終えて

「何気ない毎日こそ美しい」をテーマに、大切にすべきものを大切にできているのかその問いかけを「静かな提案」として社会に投げかける写真家渡邊真弓さんの試みが理解できたように思う。写真という「視覚の共有」から、日常の中にある美しさ・きれいさをコミュニケーションしていきたいという言葉が深く印象に残る。そして何よりも日常の美しさを受けとめていく女性ならではのきめ細かく柔らかな視点を持つ写真は、生活そのものの美しさを見直すことを促し、社会や人に勇気や共感を与える。写真を撮るという作業は、人とつながり社会に提案するものであることが理解できる。またライターという具体的な視点から被写体を覗くことで、より鮮明に自己のメッセージを自問できる作業なのかもしれない。

(向井聖子)